

マンガを素材とする異文化理解教育の方法開発

因, 京子
九州大学留学生センター助教授

日下, みどり
九州大学比較社会文化研究院教授

松村, 瑞子
九州大学言語文化研究院教授

<https://hdl.handle.net/2324/16817>

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成，2005-03
バージョン：
権利関係：

中級以上のコミュニケーション教育の課題と方法

－マンガを用いた日本語学習の可能性－

因 京子

(2004. 12.18)

中級以上のコミュニケーション教育では、最低限の内容伝達というレベルを越えて場と自分の表現意図にふさわしい表現を行えるようになることが目標となる。この目標に向けて待遇表現の使用を焦点としたものなど発話技能の洗練のための提案がいくつか行われているが、理解技能には、使用環境との接触の増加に伴って自然に向上すると期待されているためか、あまり注意が払われていない。しかし、ストーリーマンガの読解作業の観察からは、上級とみなされる学習者でも日本語の文体的な特徴の機能や文化的前提の理解が不十分であり、その結果、日本語母語話者の発話の意図や発話に示された態度をしばしば大きく見誤っていることが示された。

具体的には、マンガ作品中の会話における丁寧体と普通体の選択及び移行の効果、ジェンダー表現の効果、「協調性・相互性の重視、謙虚さの重視」という文化的価値に支えられた社会的上位者の言語行動などの理解に看過できない問題が見られた。

学習者は実際の接触場面では表情や音声などから発話者の意図や真意を概ね正しく推測しているのかもしれないが、言語形式と意図との関係、効果の生み出される機序について明確に意識化した結果としての理解ではないため、確実性に欠け、自らの発話において使用できる技術へと一般化されるには至っていない。「わかるけど、うまく話せない」「日本人の本音はわかりにくい」など、しばしば耳にする上級学習者の訴えの裏にはこうした事情があるのではないかと考えられる。

洗練された発話能力を涵養するには、「モデルの記憶と、応用的模倣による産出」ではなく「効果の構成要素と効果成立の機序の認識と、創造的産出」という訓練を行なう必要がある。即ち、回り道のようにも、産出技能訓練の前に理解技能に特化した訓練を行うことが効果的であると考えられる。ストーリーマンガの中でも、日本社会の実情を反映する現実的設定で複雑な人間関係を含む作品は、この目的のための素材として大きな可能性を持っている。 (九州大学)